



第31回定期総会を開催

6月28日、町上会館にて、富谷市日中友好協会第31回定期総会が開催されました。第一部では、はじめに松田勝幸会長より、この一年の活動への御礼と、当会への多大なるご貢献に対する感謝状が小出ますみ氏に贈呈されました。また、来賓の若生裕俊市長、畑山和晴議長、中山耕一県議より、今後の活動に対する期待と温かい励ましのお言葉を頂戴いたしました。最後に参加者全員で記念撮影を行い、第一部を締めくくりました。

第二部の議案審議では、2025年度の活動報告並びに決算報告及び監査報告、2026年度の活動計画並びに予算及び役員人事が審議され、全て承認されました。役員人事では、新たに、理事に千葉秀輝氏、監事に中鉢広氏が加わり、松田会長をはじめ他の役員は再任となりました。

総会終了後には、恒例のビンゴゲームでの懇親会が行われ、会員同士の親睦を深める時間となりました。2026年度も、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



中国由来の諺

日本には、昔から言い伝えられた「諺」があります。中国由来のものもあり、今の時代でも様々な場面で通用するものも多く、例えとして使われています。

『瓢箪から駒』 (Web:Agent iで検索)

=意味=

思いもよらないところから、意外に立派なもの・本物が現れることや冗談半分で言ったことが本当になってしまうこと。

=由来=

よく紹介されるのが、中国の仙人「張果老」の伝説に由来するという説です。

張果老は、白いロバ(あるいは馬)に乗って旅をしていた。目的地に着くと、そのロバを瓢箪の中にしまってしまう。必要になると、また瓢箪からロバを取り出して乗る。この「瓢箪の中から馬(駒)が出てくる」という不思議なイメージが、日本に伝わり、「瓢箪から駒」という言い方になったと説明されています。

この話は、中国の神魔小説を集めた「四遊記」の一つ「東遊記」に出てくるとされています。

=伊達政宗と「瓢箪から駒」の逸話= ことわざを地で行くような有名な話があります。

戦場の陣中で、諸大名たちが香木の銘柄当ての遊びをして、刀など立派な品を景品に出していました。そこへ政宗が、たった一つの「瓢箪」を景品として出したので、周りの大名たちは「なんだそのケチな景品は」と内心あざ笑ったと言われます。ところが後になって、政宗はその瓢箪を手に入れた武将を呼び寄せ、「その方にこの馬を取らせる」と言って立派な名馬を与えます。驚く周囲に対し、政宗が笑って言ったのが「瓢箪から駒が出るというではないか」という一言だと伝わっています。

